中国農村研究における「差序格局」概念の適用の試み
― 重慶市一「新農村」における祝賀会の内在的検討 ―

杜　安然

はじめに

現代中国の農村研究では、中国の人類学者・社会学者、費孝通が 1948 年に提起した「差序格局」[1] 概念への言及が増えている（南 & 閻 2019；川瀬 2019）。この数十年の間に生じた農村社会の急激な変貌を受けて、そこにある人間関係についての原理的把握が必要になってきたからだろう。筆者も、三峡ダムという巨大開発事業により、代替地に移転した人々の生活再建過程を調査しようとしていた時、高層建築の並ぶ「新農村」[2] へと変貌した農村で、政府による住民への祝賀会「素朴化」要請にも関わらず、伝統行事である祝賀会が見事に復活している様子を目の当たりにした。現地で実際に参加した「祝賀会」は、開発によって途切れた生活と関わる人間関係の再構築にもみえたのである。その復活を説明する上で、まず頭に浮かんだのが、費の提唱した「差序格局」という古典的概念である。

しかし、「差序格局」という概念は、理解の難しい概念でもある。理解が難しい理由の一端は、ほかならぬ費自身の提起の仕方にある。費は、中国農村のフィールドワーカーとして研究を始めた研究者で、「差序格局」にも実証的な農村研究の知見が生かされたはずである（翟 2009：153；閻 2017：176）。にもかかわらず、費は、この概念を随筆風の論文のなかで提起した。そのため、この概念は「人間関係優先主義」という、中国文化論の文脈で論じられることが多かった。また、時代の変化につれて、「差序格局」という伝統的な人間関係のモデルは既に変形したと指摘する研究も増えた。その一方で「差序格局」という人間関係のパターンを必要としてきた農村生活の実態との関連については、長い間、顧みられることがなかったように思われる。

本稿では、20 世紀前半の提起以来の「差序格局」概念理解の変遷を、中国農村研究をもとに検討し、現代中国農村の研究における概念の有用性を明らかにしたい。そのためには、次の 3 点を検討することが有用であるだろう。第一に、概念形成の過程である。イギリスやアメリカ合衆国に留学し、欧米の人類学・社会学についての知識を持っていた費が、なにゆえに「差序格局」という民族固有の概念をつくりだす必要があったのか、という点を考えたい。第二に、費の提唱以降の概念理解の変遷である。本稿では、この変遷を、主に現代中国の地域社会研究、特に農村研究に主眼をおいて検討する。その上で、第三に、筆者自身の調査の体験から例を出して、「差序格局」という概念を農村研究に用いると何が見えてくるのかを、先述した三峡地域の「新農村」における祝賀会復活の事例に見ていくことにしたい。

本論に入る前に、まず、人間関係の原理的考察とは何かについて簡単に説明を加えておこう。原理とは一般的には、よってたつ原則とか、事物の根本要素を指している。ただ、農村社会学に限ると、すぐに浮かぶのは、日本の著名な農村社会学者、鈴木栄太郎（1968）が著した『日本農村社会学原理』であろう。鈴木は、この本の中で「生活原理」という言葉を盛んに用いている。たとえば、研究

史によく引用されるフレーズをあげると「最も乱されない日本人の心は、農村の家や村の中にひそんで居る不文の生活原理にこそ其最も正しい姿を見出し得る筈である」といった使い方をしている（鈴木 1968：3）。この一文からもわかるように、鈴木のいう生活原理とは、農村の人々自身の原則であり、人々の行動原理として観察できるものである。本稿での原理的考察とは、鈴木に習い、当事者である中国農村の人々自身の視野構造からみた行動原則についての考察を指している。また、こういうと、鈴木のいう生活原理は、現代日本の社会学における生活構造概念と関連があることも理解されよう。生活構造とは、社会学者の三浦典子によると「生活主体の社会構造と文化構造への主体的な参与の総体」のことだからである（三浦 1986：5）。鈴木のいう「不文の生活原理」とは、農村の人々に固有な生活構造を指していたといってよい。

本稿では、最終的に、農村研究における「差序格局」概念の有用性を、中国「新農村」の人々の生活構造についての分析概念として提起する。以下では、費本人は「差序格局」をどのように解釈したのか、そして、中国の社会学者たちはどのような評価をくだしたのかを考察しよう。

1．「差序格局」概念の提唱とその評価

1.1 「差序格局」とは

「差序格局」とは、己（自己）を中心とした親疎遠近に応じての人間関係のネットワークに支えられる社会構造である。費は「『己』（自己）が中心にあるため、石を水中に投げ入れたときのように、他人との『関係』[3] で生まれる社会関係は、集団的な構造配置の中の一員が皆一つの平面上にあるのと異なり、水面の波紋の如く一輪一輪と広がり、外に行くほど遠くなり、外へ行くほど薄くなる」と説明した。その上で、集団を基礎とする西洋社会と対比させることで、「差序格局」の優越する中国社会の構造的特徴を示そうとした。

費は、西洋の社会について、個々の人間を稲にたとえつつ「我々の田畑にある束ねられた柴のようなところがある」という。「一本一本の柴は・・（中略）・・それぞれきれいに束の中に収められて乱されることがない」ために、「数本の稲を束ねると一把となり、数本の把を束ねると一扎になり、数本の扎を束ねると一梱となり、数本の梱を束ねると一挑となる」（費 1948=2019：66 ～ 7）。西洋社会の社会構造とは、この束ねられた柴である集団が基礎となっている。内部と外部に境界線がひかれ、メンバーシップが明確な集団が社会構造の基礎となっているというのである。

このような西洋社会との対比を念頭において、中国の社会構造を費は次のように説明する。「我々の社会構造は、一束一束ときれいに括られた柴のようなものではなく、あたかも一つの石を水面上に投げ入れると一輪ずつ広がっていく波紋のようなものだ。各個人は一人一人が、自らの社会的な影響によって生み出した『圈子』（輪）の中心となる。そしてその『圈子』（輪）の波紋が及ぶ所に『関係』が発生する。同一人物でも、ある時間、ある場所で生み出される『圈子』（輪）は必ずしも同じではない」（費 1948=2019：68）。

この波紋にたとえられる「圈子」はとても重要である。そのため費は、血縁と地縁を例にあげて「圈子」概念の説明を補足している。まず血縁（親族関係）でいうと、個人を中心としたネットワークこそが親族関係の基礎だと指摘する。「我々の社会の中で最も重要である親族関係は、まさにこの石を投げて生じる同心円の波紋のような性質を持っている…生育と婚姻によって形成される『ネット

ワーク』（網絡（ワンルオ））は、過去の人から現在の人、そして未来の人へと無限に連なっていく」（費 1948=2019：68）という。

地縁関係の構造においても「圈子（チウエンズ）」は重んじられる。「伝統的な構造のなかでは、一家ごとに自らを中心として、その周りに『圈子（チウエンズ）』（仲間の範囲）を線引きしてある。この範囲が『街坊（近隣）』である。婚礼があれば酒を振る舞い、子供が生まれれば『紅蛋（ホンダン）』（赤く染めた卵）」を送り、葬式があれば納棺を手伝いに行き、棺桶を担ぐなど、生活上の互助組織となっている。しかしこれは決して固定的なグループではなく、一つの範囲にすぎない。範囲の大小は中心にある家の勢力の強弱によって決まる」という（費 1948=2019：69）。このように、費の指摘する「差序格局」とは、単なる人間関係優先主義ではない。それは、中国社会の人々の行動を左右する人間関係の固有のパターンなのである。

さらに費は、「差序格局」を基礎的な構造とする中国社会は、西洋社会と異なる道徳観を生み出したと指摘する。「自己を中心とする社会関係のネットワークにおいて、最も重要なのは当然ながら『己を克服し、礼に立ち戻る』、『（天子から庶民まで）同じように皆、身を修めることを根本とする』である。これが『差序格局』における道徳体系の出発点である」というのである（費 1948=2019：86）。また、「『差序格局』をとる社会は、無数の個人間の関係でもって構成されるネットワークから成りたっている。このネットワークの一つ一つの接点の全てに、道徳的な要素が付随している」（費 1948=2019：87 ～ 90）ともいう。

「差序格局」という基礎的な社会構造の存立根拠を、費は、中国の伝統社会の生活実態に求めた。伝統社会とは、工業革命以前の、伝統的な農耕社会をイメージすればよい。伝統的な農耕社会では、多くの人口は農業に従事し、土地の上にへばりつき、代々同じ村で定住している（費 1948=2019：33）。そのような社会での人々の関係には、二つの特徴が生まれると費はいう。

第一の特徴は親密な人間同士の信頼であり、第二の特徴は、儀礼的態度である。まず、信頼からみていくと、それは慣れ親しさから生まれるので、法律のような普遍的規則は発生しない。西洋社会のように法律や契約に従う行動をすれば、「ずいぶん他人行儀じゃないか」となるという（費 1948=2019：36）。お互いは熟知している間柄なので、個別的な対応が可能である（費 1948=2019：36 ～ 7）。さらに、その信頼感を築き、親密な関係を持つ各人が共同生活の中で、長期的に相互に依存しあうことを「人情（レンチン）」と呼ぶ。また、そういう場面が多いため、授受の度ごとに一々清算することもできない。費は、各人はお互いに「人情（レンチン）」の貸し借りを繰り返すことによって、人と人の相互の協力関係が維持されていくことを強調した。

その舞台が村落である。村落間の往来は地理的に限られ、断絶とは言えないが、まばらである。各村落は孤立した社会的な『圈子（チウエンズ）』（仲間の範囲）を持っている（費 1948=2019：35）。そういう文化の変動が乏しい村落という社会の中では、祖先から累積され生活に役に立つ方法を、続く代々に引き継ぐことができる。費によると、「長幼の間に社会的差異が生じ、年長者は年少者に対して強制的な権力を持つようになる」（費 1948=2019：161）。また、「先人が生活上の問題を解決するのに用いた方法を、そのまま自分の生活の指南として踏襲することができる。前代の生活でその有効性が証明されればされるほど、それを守るに値する」ものとなる（費 1948=2019：123）。

第二の特徴である儀礼的態度は、その結果である。伝統社会では、国家の行政権力の浸透は希薄で、村落の管理は長老統治によって行われた。その中で、社会に公認され、適正と認められた行為の規範

は「礼」である。「礼」は単なる「上品で礼儀正しい」、「文明的な」、「慈善的な」、あるいは「人に会えば会釈を交わす」、「極悪非道なことをしない」、という意味を指していない。「礼」は状況によって人を殺すことがあり得る、「野蛮」にもなり得るものである（軍礼など）（費 1948=2019：121）。費によれば、西洋では、法律は国家権力によって外側から人を制限し、道徳は社会の世論によって維持され羞恥を人に感じさせる。だが、「礼」の機能は、道徳よりもさらに甚だしい（費 1948=2019：124）。もし礼に合っていない行いをすれば、「正しくない」、「道理に合わない」、「物事は成り立たなくなる」一方、他人に監視され、指摘されないところでも、「礼」に合った行いを止めることができない。だから、「礼」は「道理に合った道筋であり、教化の過程を経て形成される、自発的に伝統に従うという習慣なのである」と、費は強調したのである（費 1948=2019：125）。

このように、費の説明は、人間関係優先主義という一般的な指摘とは異なる。費の関心は、差と序という、固有の型を示す人間関係にあるからだ。差序のもっとも基本的な含意は「差異」がある各人と「己」の「関係（グアンシー）」の親疎遠近である。中国社会の人々は差序という人間関係によって、直面する異変に対処しようとすることになる。費は、さらに、こうした人間関係のパターンが、長い歴史を持つ農耕社会の人々の集住という生活実態に根拠を持つことを指摘した。中国社会の特徴として指摘される長幼や社会地位の「差異」を重んじる伝統的「秩序」（礼）は、費によれば、農村における人々の生活上の行動の反復から派生した社会構造なのである。

1.2　研究者の評価

「差序格局」概念は、費の研究対象だった農村生活の実態と切り離せないが、他方で文化論的にみえる面を確かに持っている。『郷土中国』は随筆のような文体で書かれており、費はたくさんの比喩を使って「差序格局」などの概念を説明した。文化論的説明は、学術的な正確さはともかくとして中国の人々にとってわかりやすい面がある（孫 1996：20; 翟 2009：153）。何万人、何億人の中国人の生活と価値観念から精錬され、中国人の実生活、実際の人間関係と合致する概念と評価されるのもそのためである（翟 1993：75；孫 1996：21；楊 1999：52）。たとえば、「差序格局」に支えられた「礼」という秩序は、「修身、斉家、治国、平天下」という儒家の秩序観と対応するという研究者もいる（翟 2009：153；苏 2017：97）。

その一人である翟は、「費がずっと強調し、やり続けた実地調査、類型比較法[4]と今まで構築した理論思考は、ここ（『郷土中国』）で巧妙に交わった」と評価している（翟 2009：153）。それらの研究方法により、中国の社会は、西洋の「法理社会」と対する「礼俗社会」、「個人主義」に対する「自我中心主義」、集団構造に対する「社会圏子」などのかたちで対比され、文化的な特徴が抽出される。また、儒教社会においての「礼治秩序」、「長老統治の教化権力」、「英雄統治の時勢権力」などがあるが、いずれも中国社会の文化的な特徴を、西洋社会との対比において説明する概念である（佐々木 2003：38）。

一方、費の研究に対し、中国の伝統社会には、知識人、官員にみられるような「集団構造」も存在するという批判があった（苏 2017：96；翟 2009：157）。このような批判は費も自覚していた。こうした疑問に対し、費は「郷土中国」の第六章―「家族」で「私は決して中国の郷土社会には『集団』がなく、すべての社会集団は『社会的圏子』の性質に属する、と言っているのではない」と反論している。たとえば、「銭会（チエンヒゥエ）」と呼ばれる組織は明らかに「集団構造」に属すると費はいう（費

1948=2019：98)。しかし、こうした一面的にもみえるモデル化には、社会構造の基本様式を抽出するという意図があると費は説明する。「私は、主要な構造から説き起こし、中国の郷土社会においては『差序格局』及び『圈子（チウエンズ）』という組織が比較的重要である、ということを指摘したいだけである。同様に、西洋の現代社会においても『差序格局』は存在しているが、それほど重要なものではない。この二つの構造はもともと社会構造の基本様式であり、概念としては明確に峻別できるが、実際には往々にして共存している」というのである（費 1948=2019：98)。

このように、費は、「差序格局」と「集団構造」との差異の強調が誤解を招くことを承知していた。それでも、中国の社会構造の「基本様式」を読者が直感的に理解できるように、西洋社会との対比というかたちで「差序格局」概念を提示した。しかし、こうした費の研究の意図は、最近まで、あまり重視されてこなかった。

このような研究動向に一石を投じたのは、費孝通の研究業績に詳しい日本の社会学者佐々木衛である。佐々木は、費の研究構想を「民族自省の社会学」と呼び、「差序格局」概念を含む費の研究を、研究構想全体のなかで理解する必要性を提起した（佐々木 2003：vii)。さらに、佐々木は、中国社会の特徴を中国人が自ら分析できる理論構築という費の意図は、今なお日中双方の社会学者に十分理解されていないとも指摘した（佐々木 2003：111 ～ 3)。そこで、この佐々木の指摘を手がかりに、費の研究の歩みをたどり、その上で「差序格局」概念と関わる研究の動向を紹介しよう。

2.「差序格局」概念理解の変遷

2.1 「差序格局」の誕生

「差序格局」概念が誕生した時代の社会背景を紹介しよう。もっとも、この点についての社会学者の研究は少なく、ほぼ佐々木衛の研究に限られる。そこで、佐々木の研究を参照しつつ、適宜、中国や日本の研究者の研究を加える形で論述を進めたい。

1930 年代前後の中国では、軍閥による分割割拠、日本の侵略、農村の疲弊など、社会崩壊への危機が知識人たちにも強く実感されるなかで、社会崩壊を回避し、社会改革を求める「社会学運動」[5]が勃興した。当時、北京大学社会学系の教授たちがその運動に参加し、「中国社会学社」という組織が作られ、「社会学の『中国化』」を目指して活動した（佐々木 2003：7 ～ 8)。「中国化」とは、中国の社会学者による中国社会についての理論構築の動きを指している。当時、若手の社会学者であった費孝通は、「中国化」を支えた代表的な研究者の一人であった。

この「中国化」によく似た動きは、中国と同様に欧米の社会学を受容する立場にあった日本でも生じていた。1930 年代になると、農村社会学を中心に、日本社会から生まれた独自な理論で日本人の生活実態を分析しようとする研究が登場した。そのような研究としては、有賀喜左衛門による家連合の研究や、鈴木栄太郎による自然村の理論などが知られている。それらの研究のうち、たとえば鈴木の農村研究は、「欧米の理論のやきなおしではなくて、独自の理論を形成」した研究だと評価されている（鳥越 1985：79)。

この時期に、東アジアに属する中国や日本で自前の理論構築がはじまった点は興味深いが、このその理由を的確に答えることは、研究が進んでいないこともあって難しい。ただ、中国と日本に限ればいくつかの共通点は指摘できる。第一に、主な担い手が中国の費を含め、農村社会学の研究者だった

という点である。第二に、中国も日本もこの時期には農村の疲弊が目立っており、研究の背景に農村の立て直しという問題意識があったことである。たとえば、鈴木は「村や家の伝統の内に生きて居る不文律」という農村の人々の「行動原理を度外視して立てられた農村対策は所詮偏頗であり姑息であるに相違ない」と述べているのは、このあたりの事情を物語っている（鈴木 1968：3）。さらに、第三に文化人類学のコミュニティ研究が与えたインパクトもあったかもしれない。費が、マリノフスキーに学んだ研究者だったことは知られているが、日本の農村社会学者、たとえば有賀喜左衛門がマリノフスキーの研究から影響をうけたことも知られている。

このような時代状況のなかで、費は、1930 年北京大学社会学系に進学した。コロンビア大学での留学経験がある呉文藻と潘光旦の下で西洋の社会学理論に触れ、それをもって中国社会の諸問題を実証的に解読しようと努めたといわれている。そして、費は 1932 年 9 月から 12 月にかけて、シカゴ大学のロバート・パーク（Robert・ Park）教授とロンドン・スクール・オブ・エコノミクスのラドクリフ＝ブラウン（Radcliffe-Brown）教授が北京大学で開催した短期集中講義を受け、費を含め、社会学系の教員と学生たちは大きな影響を受けた。彼らは西洋の社会学理論を中国社会そのままに「嵌る」ではなく、中国本土のコミュニティ研究への応用に着手し、実地調査を重んじる研究が必要であることを気付いた（佐々木 2003：8；翟 2009：153）。

その後、費は呉文藻の紹介で、1936 年から 1938 年にかけてロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに留学し、人類学者マリノフスキー（Malinowski）のもとで文化論、機能主義を学んだ。その成果として、1939 年、江蘇省蘇州市呉江県にある、養蚕業が盛んだった一つの農村 – 開弦弓村を調査対象として書かれた学位論文『Peasant life in China : a field study of country life in the Yangtze Valley』（Fei1939）（日本語訳では『江村経済』）が出版された（佐々木 2003：22）。

『江村経済』は、民族誌的な記述を通して、一農村における農民の生活や、伝統文化など、また近代化の衝撃を受けた農村の変化を細密画のように描いたことで有名である。費の代表作として、費の農村研究のフィールドワークの起点に位置づけられるのもうなずける（佐々木 2003：22）。1938 年帰国後、費は雲南大学で社会学部の教授を務め、開弦弓村の調査結果と比較しながら雲南省で少数民族が集まった三つの村を調査した[6]。そのような実地調査を進めるうちに、費は次のような問題にぶつかったといわれている。「現地社会に合う社会学理論的根拠がないと、社会調査をやっても、散らかった無意味な資料を集めただけ」になってしまうというのである。このようにして、費は理論構築の重要性に気付き、中国の家族と社会の基本構造、秩序の論理の構築に着手し始めたとされる（翟 2009：153；佐々木 2000：35）。

その際、費がお手本としたのは、主に人類学者であるマーガレット・ミード（Margaret・ Mead）とルース・ベネディクト（Ruth・Benedict）の社会的性格の研究法だった（佐々木 2003：41 ～ 2）。1943 年から 1944 年にかけて一年間、政治避難のため、費は研究者としてアメリカ合衆国に旅行し、コロンビア大学、シカゴ大学、ハーバード大学などを訪ねた（佐々木 2003：41 ～ 2）。当時、アメリカにおける都市のモノグラフ研究が盛んで、その中でも、費は特にマーガレット・ミードの研究を高く評価したとされる。それらの点に踏まえ、佐々木は、こうした人類学者たちの研究は、中国社会を個性的な構造を持つ文明化された社会として研究する可能性を費に教示したと推測している（佐々木 2003：45 ～ 6）。

この点は、費自身の記述からも窺える。費（1947）は『美国人的性格』の後記[7]で、当時の目標

を次のように語った。「自分たちの文化根源、そして現状、また発展の方向に対して、総体的整理と把握が必要だと思った…科学的方法を使って、中国人の生活様式とその様式から生まれる観念を、丁寧に現在と歴史の背景を説明しなければならない。それを解明することによって、現在（の中国社会）を苦痛と消耗から救い出せる（道が見える）」（費 2018：55）。このように、費も日本の農村社会学者と同様に、農村の疲弊と解決という問題関心をもっていたのである。

そのような念頭に置いて、アメリカから帰国した費は、中国の人々の社会観に根ざした家族論を構築しようとした。その成果は、1947 年に、『生育制度』というタイトルで出版された（費 1947=1985）。その内容は、佐々木が指摘するように、西洋の家族制度と比較しつつ、主に中国人が一般的に日常的に経験する家族の具体的な様態を考察したものだった（佐々木 2003：24；翟 2009：153）。そして、ほぼ同期に、費は『郷土中国』（1948）を出版し、その内容は、費の大学講義と新聞投稿から整理され、随筆のような文体で中国の基礎社会の構造的特色を記述したものであった[8]。「差序格局」という概念は、この本の第四章で初めて登場する。

その研究動機を次のように説明する。当時の学界と政治界では、近代化の風潮に当たって、農民とは、「泥まみれ」や「教養がない」、「時代遅れ」の存在だと認識していた。そういう「農民心性」を変えるために、農民に文字や知識を教えることが旨だった「文字下郷」という運動が行われた。しかし、長年農村でフィールドワークをした費は、そういう「農民心性」に対する軽蔑や批判は誤解と偏見によるものだと指摘した（費 1948=2019：47 ～ 54）。費によると、農民は自分の生活様式に適応する知恵を持っている。その知恵の最も代表的な特質は「私（シ）」（「自己中心主義」）だというのである。彼は、「差序格局」という社会構造を通して農民が持つ「自己中心主義」、及びその概念から派生した「私（シ）」と「公」の相対性を読者に理解させようとしたのである。

「差序格局」を作り上げるまでの研究道程を振り返れば分かるように、「差序格局」概念提唱のバックグランドには、農村の実地調査の膨大な蓄積があった。では、現代の「差序格局」の理解には、農村の生活との関係はどのように意識されているのか、それとも意識されていないのか、この点を、現代の研究動向から説明してみよう。

2.2　現代の研究動向

社会学者における「差序格局」に対する研究には、その目的によって便宜的に三つに分類できそうである。まず、中国人の基層文化の解明を目的とする文化論的アプローチ、経済成長による社会の変化を説明しようとする社会変動論的アプローチがある。これに対して、冒頭で述べたようにごく最近の動向として農村生活の分析に関心をおくアプローチがある。これを、ここでは生活論的アプローチと呼んでおくことにしたい。

それらの研究には、いずれも中国社会の変化が関わっているが、文化論的アプローチや社会変動論的アプローチは、その根底に急速な経済成長の理由を知るという関心を共有している。これに対して、後述するように、生活論的アプローチは、少し違っている。経済成長の中ではやや周辺的な位置に置かれている現代中国農村の実証的研究のなかで登場したアプローチだからである。筆者の関心は、この 3 番目の生活論的アプローチにあるけれども、以下それぞれのアプローチの特色をみたうえで、その生活論としての特徴をまとめておこう。

2.2.1 文化論的なアプローチ

第一に、「差序格局」を中国文化論の文脈で論じる研究である。このタイプの研究上の関心は、「差序格局」の骨子になる－「関係（グアンシー）」、「面子（メンズ）」、「人情（レンチン）」に集中している。

「関係（グアンシー）」に関する古典としては、マックス・ウェーバー（ Max Weber）（1920）が呈示した「人間関係優先主義」（Personalismus）が挙げられる。ウェーバーによると、当時（19 世紀末）の中国は、安定的な、停滞的な儒教的世界とイメージされ、社会には普遍主義的な理念は形成されず、社会生活のあらゆる場面において具体的な人間関係が優先した（Weber1920=1995）。

このようにウェーバーの研究が中国社会の停滞を説明する議論であったのに対し、1978 年末からの改革開放政策以来の研究は、中国の経済発展と相呼応するように、現代中国人の特質及び中国人の行動文法を理解させる点に特徴がある。例えば、1980 年代初期、西洋の経済学者は華人社会における経済活動と宗族関係との関連性について、「関係資本主義」という言葉を用いて、「関係（グアンシー）」は中国人の経済活動おいて重要な役割を果たしているとする研究がある（何 1998）。また、台湾の社会心理学者黄（1988）も、同様の関心から研究を行っている（黄 2004：1 ～ 40）。

その後、翟（1993；1999；2004；2009）はこのテーマを深化させた。彼によると、まず、中国人の人間関係は「人縁」（血縁、地縁、姻縁、業縁）、「人情（レンチン）」（「礼」の影響で、喜怒哀楽の意味から人と人の間で遵守すべきの「情義」を指す）、「人倫」（同情心がある人間関係）から構築され、費の研究は「人情（レンチン）」研究に属すると分析した（翟 1993：74 ～ 83）。そして、翟（1999）は、「人情（レンチン）」と「関係（グアンシー）」は「面子（メンズ）」から派生した概念だと主張し、その理由は、「血縁関係や、地縁関係などの客観的な関係を持っても、相手は『面子（メンズ）』を持つ人とは限らない。『面子（メンズ）』がない人に対し『人情（レンチン）』と『関係（グアンシー）』なんかを維持しようもしないし、もし維持しても、他の誰かの『面子（メンズ）』を買っているから仕方がない」からである（翟 1999：148）。また、翟（1999）は「個人地位」（personal status）という概念を用いて「面子（メンズ）」と「人情（レンチン）」と「関係（グアンシー）」を論理的に概括した。彼によると、中国人を対象に研究する時は、単なる「差序格局」の中の血縁関係と地縁関係などの客観的な人間関係だけを焦点に置いて中国人を研究すれば、誤差が生まれるので、主観性がある「個人地位」の生成、獲得、及び維持、また「社会地位」との関係に焦点を置くことを通して、よりリアリティがある中国の社会構造を見えるではないかと強調した（翟 1999：149）。

一方、日本の社会学では、1980 年代以降に台頭した内発性論の影響を受けたこともあって、社会の近代化への機能から切り離して、中国一般人における人間関係の特質を再解釈しようとする研究が登場する。日本の研究も、費の「差序格局」はウェーバーの「人間関係優先主義」を概念化としたものだと認識している（園田 1988：55；首藤 2002：313；李 2012：39）。その内容をやや具体的にみておこう。

園田（1988）は中国社会の構成原理を「関係主義（グアンシー）」という言葉を使って表した。「関係（グアンシー）」は「面子（メンズ）」といったフィルターを通じて自我と他我とを結合し、費の「差序格局」が呈示した「自己中心主義」のような性質を持って、流動的かつ複雑化していると同時に、強い自己肯定意識を生み出し、「関係（グアンシー）」の内部では強い平等主義的な横の力学が生じる（園田 1988：56 ～ 7）。また、園田（2001）は黄による「人情（レンチン）」に対する定義について「自己からの距離によって他者を位置づけ、その距離に応じて自らの行為を決定しようとする心理的メカリズム」と補足した（園田 2001：145）。

こうした日本における中国「関係（グアンシー）」の研究は、李によると、「正か負かという視点からではなく、

「面子（メンズ）」を手がかりとして、中国人の行動文法を説明し、人間関係網の形成を解明しようとしている」と位置づけている（李 2009：40）。

2.2.2　社会変動論的なアプローチ

「差序格局」は、伝統的な農耕社会から抽出されたモデルである。したがって、社会変動が大きくなれば有効性は減少するかもしれない。事実、現代の中国社会は、改革解放後、農業社会から工業社会への転換と経済成長がもたらす社会の劇的な変化に直面している。本稿での社会変動論的アプローチとは、経済成長に適合的な社会関係とは何かという関心から、「差序格局」よりも有効な概念を探ろうとする研究の総称を指している。以下、そのいくつかを紹介しよう。

まず、社会資源の分配制度への視点の切り替えがある。たとえば、孫や楊は、費の提起した「差序格局」は、倫理や道徳の水準での人間関係の説明であり、社会資源の分配制度による人間関係の形成作用が抜け落ちているという（孫 1996：21；杨 1999：52）。さらに卜は、小農経営中心の流通性が乏しい伝統社会からの変遷を踏まえた新しい理論の必要性を指摘する（卜 2004：26）。

こうした主張の背景には、中国社会の社会変動に適合的な社会関係創出という関心がある。その一つに社会関係資本（ソーシャルキャピタル）という視点から「差序格局」の機能変化を指摘する研究がある。社会での資源交換と調達のメカニズム、また社会構造変化との関連性を「ソーシャルキャピタル」と「ソーシャルネットワーク」の視点から解釈するものである（翟 2009：154）。たとえば、その一つに香港大学の李の研究がある。李は、競争が激しい現代香港社会の人々は、「差序格局」に基づくソーシャルキャピタルを用いて功利的な人間関係を築くと考え、「道具性差序格局」という新しい概念を提示した（李 1993：65 ～ 76）。

この研究に触発され、中国本土では、1990 年代以降、「差序格局」を出発点としつつも経済成長に適合的な人間関係の創出に向けた研究が行われてきた。経済成長に適合的な関係とは、たとえば、「関係（グアンシー）」と市場経済、政治腐敗、法律との関係である（翟 1999：144）。公共的な規則を上回る私人関係の存在は、中国を「人治社会」に陥らせる危惧が生まれる。そこで、社会秩序や経済発展に弊害をもたらす要因として、「関係（グアンシー）主義」をどう避けるかという政策研究が多数登場した。その影響もあって、「関係（グアンシー）主義」による負の事例や、その克服方向も研究対象になった（園田 1988：60 ～ 2；马 2007：136 ～ 140）。

その後、孫（1996）は、1949 年から 1990 年代中期までの、社会資源の分配方式の変化に焦点を当て、社会資源の分配が社会構造にいかに影響を与えるのかの原理を分析した（孫 1996：20 ～ 30）。孫は、社会資源の分配が主に血縁に基づいて行われてきた伝統社会では、血縁関係や地縁関係が人々の生活に重視されたという [9]。しかし、1949 年中華人民共和国の建立は、従来の「差序格局」という社会構造に根本的な変化をもたらし、社会資源の配置制度は社会主義再分配経済体制に置き換えられた [10]。この新しい資源配置方式の上で人々は新しい人間関係を構築しなければならない。構築される新しい人間関係には二つのタイプがあったと孫はいう。第一に、人民公社と単位の中で存在する上級関係と下級関係の間でよくみられる、「庇護関係」で、第二に、同じ社会地位の人達の間で存在する水平的な「道具的な私人関係」[11] である（孫 1996：25）。

その後、1978 年改革開放後、人民公社が解体され、文革という激動の時代を経験し疲れ果てた人々と政府は、経済条件の改善を圧倒的に重要な位置に置いた。市場経済が先行する環境の下で、個人能

力と個人地位によって社会資本を獲得でき、あらゆる「関係（グアンシー）」を自分のソーシャルネットワークに取り入れようという「道具的な特殊主義関係」が形成した。多くの論者は90年代以降ソーシャルネットワークの拡大を「差序格局」の復帰だと結びつけることに対して、孫は、社会構造の変遷と功利主義の影響を無視した結論だと批判した（孫 1996：26）。

一方、農村の家族企業の発展を研究した楊と侯（1999）は、「差序格局」という農村の伝統的な関係は、合理化（中国語では「理性化」）されつつあると指摘した。楊と侯によると、1980年代以降、姻縁関係、擬似血縁関係[12]、利益関係は「差序格局」に入った。また、農民は家族企業を経営する時、「利、権、情」という有効なモデル――「内協力体系」を選んだ。「利」とは「共同裕福」という目標を追求するための生産経営における互酬互恵の行為、「権」とは、村集団（村の社会資源の所有権を持つ組織）の発展を軸としての協力、「情」とは、「人情（レンチン）」を基づいた秩序である。こういうモデルは「差序格局」の下で建立され、農民は企業の「家族化」と、利益関係の「擬似血縁関係化」によって、ソーシャルネットワークの拡大を図っている。その結果、商業に対して必要になる「理性」と礼俗社会に根ざした「人情（レンチン）」は共存することが可能になり、血縁関係と地縁関係を中心とした「差序格局」は、擬似血縁関係の出現によって多元化と合理化に遂げたと、指摘した（楊・侯 1999：51 ～ 8）。

このように、経済成長を原動力とする社会変動論的アプローチからの研究は、総じて「差序格局」にかわる分析概念の必要性を強調する。さらにその概念形成の方向は、経済成長に応じた合理的な社会関係の分析にあるという点も共有されている。

2.2.3　生活論的なアプローチ

2010年以降になると、上記の二つの方向とは異なる、新しいタイプの研究が登場する。それは、「差序格局」概念の出発点でもある中国農村社会研究のなかでの再検討である。なぜこのような研究が21世紀になって登場したのであろうか。

社会学者の南（2019）によると、2000年以降、中国農村の社会学的課題は、農村集住化政策と農民実生活との乖離、郷鎮政府と村や村民との関係の希薄化、農村の過疎化と混住化の三点を指摘することができる（南 2019：13 ～ 21）。この南の指摘を、筆者自身の言葉で言い直すと次のようになる。かつて、費が「差序格局」を提起した時期の中国農村は明らかに疲弊していた。内戦や日中戦争などの戦乱による社会的混乱もあって、問題となったのは貧しい農民がいかに生き延びるかという貧困の問題だった。今の中国社会は、この時期とは全く異なる豊かな社会に変貌しつつあるが、今の農村は、やはり疲弊しつつある。農村研究者による「差序格局」の見直しは、この豊かな社会における、過疎などの農村の疲弊のからくりに関心が向かうようになったからだと考えられる。

たとえば、董と李（2015）は、河北省一村落における婚礼の「ご祝儀」に関する実地調査に基づいて、農民の実生活によくある「随礼（スウイリ）」（気持ち的にご祝儀を送ること）の額の変化を調査した。従来の「差序格局」にしたがえば、親戚同士は、必ず予め額の多少をまず協議し、最終的に経済条件が一番悪い人がその金額を指定することによって同じ額を送ろうという、「皆が軽く婚礼に参加できるように」、「気持ちだけでいい」ということになる。だが、今は、「ご祝儀」を多く送ることは「面子（メンズ）」の誇示と直接に繋がることになるので、「随礼（スウイリ）」は農民にとって大きなストレスになっていると董と李は指摘する。この調査によって、従来の地縁関係と血縁関係の繋がりは農村の過疎化によって緩やかになり、従来重視された長幼差異の重要性も失われつつあるなかで、農村生活の中で経済条件の優

劣が「面子（メンズ）」の有無と関わる一番の指標になるのではないかと指摘した（董・李 2015：118 ～ 126）。つまり、豊かさが増すなかで、経済的な格差が差序の指標となってきているというのである。

ただ、豊かな社会の農村は、ただ疲弊しつつあるわけではない。この点を指摘した研究には閻（2017）による現代中国農村の人間関係のあり方についての研究がある。閻は、費が討論した農村の「公」と「私」の在り方という関心を継承し、山東省の一村の人たちが「理」を持ち出しても解決しないような生活上の揉め事などに直面した場合、村人は「どのようなことが公平か」に対する討論、行為の正当性基準である「情」を探りだす過程を記録し、「私＞公」と論じてきた「差序格局」構造下の農村において、「私＜公」となる「下からの公」はどのようなメカニズムで生成したのかを探求した。閻によれば、「差序格局」の下で日常的に相手の「情（こころ）」を分かり合おうとする人間観、社会観で生きる人々自身が、「評理」（公平を探し出す）の場においては、「情」に根ざした公を探り出すことができるというのである（閻 2017：176 ～ 193）。中国一般民衆が自らの日常生活を秩序立てる「公」を作り上げる行為を通して、ネポティズム社会・中国といったステレオタイプの見方から解放し、中国人のもつ「情（こころ）」の理解を深める試みである。さらに閻（2019）は、北京市郊外の農家楽[13]が盛んな村を取り上げ、「差序格局」を支えた「礼」の概念を通して、村の外部者にも情報共有が可能になる論理を考察している（閻 2019：92 ～ 115）。

さらに、人類学者の川瀬（2019）は、江蘇省南京市郊外にある一つの村で二年間の住み込み調査を通して、「差序格局」概念の見直しに言及した。川瀬によると、「共同体なき社会」と言われ続けた中国農村社会では、実際には「流しのコンバイン」が活躍するような社会であり、「家（ジャ）」が伸縮するような社会でそこには強固で濃密な人間関係があるという。「『共同体がない』ことは、現地の農村において共同生活が存在しないことを意味するわけではない」（川瀬 2019：4）のである。川瀬は、即興性や偶発性が溢れる日常生活に応じて、様々な基準で自己と他者との間の関係を柔軟に構築していく場面を捉えるためには「差序格局」という分析概念が重要だとする（川瀬 2019）。

このように「差序格局」をベースとして、農村の人々の生活実態を分析しようとする研究も登場している。こうした生活についての「厚い記述」を前提とした調査はまだ少ないが、静態的・受動的な農村理解を乗り越え、農民自身の望ましい生活への考え方を軸に、社会と個人相互依存関係、現代社会を解読しようとする方向を、ここでは生活論的アプローチと呼んでいる。このアプローチの特徴は、「差序格局」を文化論的アプローチのように、静態的なパターンとして一般化をはかるのではなく、かといって、社会変動論的アプローチのように、経済成長に適合しない克服すべき人間関係とみなすのでもない。いわば、農村の人々の生活再編の実態に根ざした生活原理を分析するための概念と位置づけている点に特色があるといえる。言い換えると、コミュニティの形成や再生に寄与する能動的な作用因を捉えようとしたといえるかもしれない。

3．事例の検討－基礎社会からみる祝賀会の意義

3.1 「新農村」と「差序格局」

上述のように、「差序格局」が実地調査に基づく農村の日常生活についての「厚い記述」を可能にしてくれる分析概念として、再び注目されるようになってきたといえる。では、こうした、研究上での概念理解の変化は、変貌著しい中国農村社会をテーマにする研究に何をもたらすのであろうか。

先行研究が示したように、社会分配制度の変化によって、農村地域における「差序格局」は「合理化」する傾向がある。また董と李（2015）の研究によると、ご祝儀を送ることが必要になる冠婚葬祭では、より多くのご祝儀を送ることは従来の「恥ずかしい」ことから「誇らしい」ことになって、功利性がある新「差序格局」の農村を彫りだした。

しかし、筆者の調査地では少し事情が異なる。筆者の調査地は三峡ダム建設による移住代替地の一つである。重慶市F県の県城（町部と中心街）として、古くから三峡地域の門戸とされてきた。だが、三峡ダム貯水池の予定地となり、長期間政府の投資が実施されなかったこともあり、「貧困農村地域」に指定された。20世紀90年代以降のF県の人口流出は激しかったが、1999年から始まった三峡ダムの建設は都市部への出稼ぎ労働の流れに拍車をかけた。1999年から2006年の7年間まで、およそ13万人が県内、あるいは県外に集団移住した（雷2002）。現在のF県の県城は離れた所に再建された鎮で、筆者が訪ねた2017年には周りの村落の中心として、政治、経済、文化、娯楽などの機能をある程度回復していた。「新農村」建設政策により、インフラの改善と福祉の推進が行われ、「城鎮一体化」、「都市化」が進むデモンストレーションエリアとも言われるようになっている。商業施設が立ち並び、その景観はすっかり都市と変わらない風景になっている。

しかし、そういう「新農村」で生活している人たちは、「都市人」のような生活様式に馴染んでいない。それは、伝統的な儀礼や伝統行事、従来の血縁関係と地縁関係を復帰させようという風潮にみられるのである。

その一つの顕れは、頻繁な祝賀会（地元で「整酒（ゼンヂョウ）」と呼ぶ）開催である。2016年8月と2017年2月に、筆者はそれぞれ一週間ほどF県に滞在し、ダム移転者をインタビューした。その時F県の町を歩いてみると、冠婚葬祭と関わる祝賀会の「通知書」が随所に貼られていた。「通知書」とは、主催者の祝賀会開催理由を紹介するものである。例えば赤ん坊は生後満一か月を祝う「満月酒」、18歳になった子どもの大学合格を祝う「成人式」、結婚を祝う結婚式、還暦（60歳）からお年寄りの長寿を祝う誕生祝い会、葬祭などがあるが、それ以外に、伝統祝日（旧正月の「春節」や旧暦8月15日「中秋節」）の祝い、引っ越しの祝い、会社起業の祝いなど、祝賀会を開く場面は余りに多い。そのような祝賀会は伝統的な中国農村社会ではごく普通だったが、1949年建国後、全国で一時禁止された。1978年の改革開放後は伝統行事や冠婚葬祭での祝賀会開催の自由は回復したものの、「ご祝儀をもらう目当ての祝賀会」が違法とされたこともあって、法的には「国家公務員は祝賀会の開催を控えるべき」だとされた（沈2008）。近年、政府の提唱もあって、都市部の民衆は祝賀会を「素朴化」、「定点化」（慶事はレストランで、葬式は葬式場で行う）しつつあるが、F県の民衆は、その逆の方向に向かっている。それは、伝統文化を捨て難いという単純な理由ではなさそうである。

F県の祝賀会は、主催者と血縁関係および婚姻関係のある「親戚圏」の人たちに加え、地縁関係がある近隣の人たち、業縁関係を持つ人たちも招く決まりになっている。もちろん、招かれる人が祝賀会に参加する際、ご祝儀を主催者に送る習慣は維持されている。F県の政府は「祝賀会をやりすぎると親友に恨まれるぞ」といったスローガン（写真1）まで街中に出して規模縮小を呼び掛けている。スローガンが示唆するように、多数の祝賀会は、参加者には経済的にかなりの重圧になるはずである。経済成長にかなう合理的な人間関係からみれば、開催は負担にしかみえないかもしれない。

しかし、筆者が参加した祝賀会場で出会った人々は全く異なる考え方を持っていた。2018年2月10日、筆者は親友の父の紹介で、実際に当地の一人のお年寄りの誕生祝い会（写真2）に参加した。

写真１　Ｆ県の町では、地元政府が作った「大した用事もないのに祝賀会をやったら親戚も友人も嫌がる、表で祝賀しても裏で悪口を言うぞ」と書かれたスローガンがある。(2018 年筆者撮影)

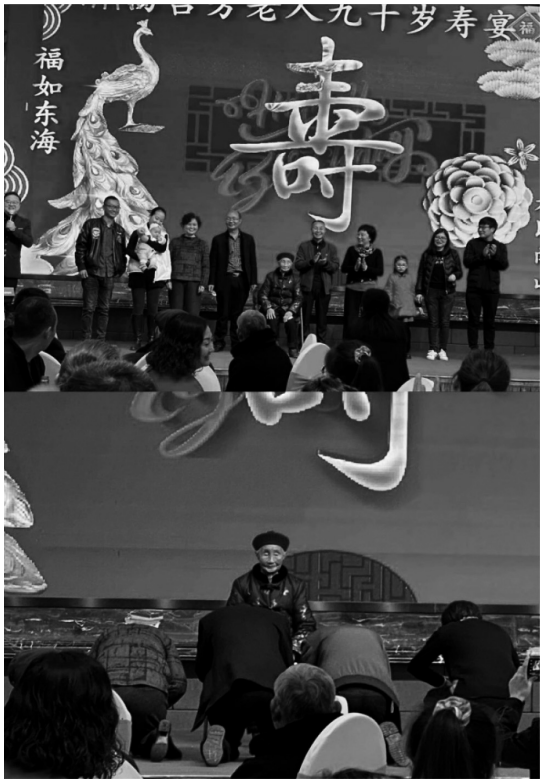

写真２　（上）Ｆ県の一人のお年寄りの 90 歳の祝賀会では、お年寄りの子孫たちはその場で一人ずつ祝福の言葉を送る。
（下）祝賀会では、主催者の子供たちは土下座でお年寄りの「養育の恩」に感謝する儀礼がある。(2018 年筆者撮影)

その際、まず何人かの参加者に「祝賀会を参加することによって金銭的な負担になりますか」という問題を尋ねた。すると皆はびっくりした顔で「そんなことを考えたことがない」、「そもそもご祝儀の額が少ない」と答えた。そこで、お年寄りの子供、三人の主催者（三人とも 60 代、以下 A、B、C で示す）に、「どうして祝賀会をやろうと思ったのですか」という質問を振った。A（長女）は「祝賀会をやることを通して（近隣の人と）お互いの「情義」を増進することが一番の目的だ。最初ここ（新県城）に引っ越したばかりの頃、周りの人が誰だかが全く分からなくなった。それが怖くて、新しい人間関係を作るチャンスとして祝賀会をやり始めた」と語った。B（次男）は「昔ずっと貧乏だったから、祝賀会なんかをやる暇などなかった。せっかくいい生活が送れようになった今こそ、昔の近隣でも呼んで、祝賀会をどんどんやるべきだと思った」と答えた。C（三男）は「親の一生は貧乏で、衣食に苦労した。特に（ダム）移転で苦労した。母さんの同世代のお年寄りや昔の近所の人たちをまだ生きているうちに招いて、皆が喜ぶし、(敬老のやり方として）子孫のお手本になるから」と語った。また、何人か都市で定住し、わざわざ祝賀会を参加するために帰ってきた 20 代から 30 代の参加者に、「どうして祝賀会を参加しようと思ったのですか」という質問に対し、彼らは、「(主催者は）親の友達で、ダム移転前から両家はよく往来し、その関係（グアンシー）が続けられるように大事にしなきゃ」、「親戚でありながら、(主催者の）孫は自分の子供と同じ年齢で、一緒に遊べるかなと思って、子供を連れて帰った」、「ただ『老輩子』（上の世代の人）たちとしゃべりたかったから」などと答えた。ご祝儀のことに対し文句を言うどころか、金銭的な話に触れる人は一人もいなかった。主催者に尋ねると、まさに皆が「気軽に参加できるように」、ご祝儀の額も少なめに、一家（五人分）に 500 元（JPY 9000 円）

を上限として設定している。地元の人はご祝儀の額について「多かれ少なかれ参加してくれる『情義』は一番大切」だと認識されているようである。特に葬式時の祝賀会は、ご祝儀の額を10元、20元（JPY 150円、300円）など、きわめて低く設定している。

祝賀会の儀礼が終わった後、筆者は、F県で生活している中年世代の人たちが集まったテーブルの談話に参加した。トークの話題にされたのは、ダム移転の時のエピソード、町のインフラの整備の進展、農加工品の取引先の口コミ、優遇政策の申請など、日常生活と深く関わるにもかかわらず、表のルートでなかなか入手できない情報がたくさん交換された。交流によって親睦を深める以外に、実用性がみえた。

実際に祝賀会に参加してみると、民衆が集まった目的と「新農村」に関する政策の乖離が実感される。この地域では、祝賀会に参加することで人間関係を深める「場」としての機能がある一方、情報交換の場という機能も持っているといえよう。この点をさらに深めておこう。

3.2 「新農村」の人間関係についての解釈

この地域の祝賀会では、董と李が挙げた村落と同じように、「随礼（スゥイリ）」が重視される。その社会的な機能は、一般的にはイベントを通じてお互いの関係性を確かめることだが、F県では、ダム移住に関する「共同の記憶」を語れる場所、または生活情報を交換する、新しい人間関係を展開するイベントというニュアンスも強まっている。冠婚葬祭を盛大に行うことを通して、主催者は「面子（メンズ）」を誇示し、金銭にとどまらない「人情（レンチン）の交換」を行うとともに、生活の記憶や生活に必要な情報を交換する機能も重視されている。このように、環境改変の大きなインパクトを受け、多数の移住者を出したF県では、行政の角度からみれば、祝賀会をやることは農民に大きな金銭的ストレスをもたらし、廃止すべき行為だと考えられた。しかし、当事者の視点からみると、そのような面よりも、「情義」の重要さが勝っていることは明らかである。また、人間関係の構築は村落、郷鎮、都市などの物理的な空間、移転前移転後など時間的な制限に拘わらず、完全に「己」の必要性によって出発し、祝賀会によって気楽に地縁関係などの人間関係を修復、あるいは維持することになる。つまり、祝賀会の復活には「差序格局」が関わっているのである。

F県は、ダム建設に伴う移住により、既存の人間関係は大きな変化を受けることになった。現在の祝賀会の復活は、人間関係のネットワークの再建の動きと無関係ではありえない。そうだとすれば、農村地域の「差序格局」の維持や再生産の実態の観察を通して、移住によって一度乱された「関係（グアンシー）」を再構築する方法を確認することもできるのではないかと考える。抽象度を変えて言い直すと、こうした試みは、「差序格局」に焦点をあてることで、現代中国農民の生活意識にあてたその場所に見合った生活構造の分析への道を開くように思われる。

4．結論　「差序格局」概念の有用性

本文は、1948年提起以来の「差序格局」概念理解の変遷を、中国農村研究をもとに検討し、大規模開発の影響を受けた「新農村」の人間関係づくりの現場から、この概念がなお手放しがたい有用性を持っていることを明らかにした。費は、日中戦争や内戦を経て、中国農村の疲弊という問題点を指摘するために、まず農民の生活様式とその様式から生まれる観念をまず明らかにする必要があると考

え、「差序格局」という概念を提示した。その後、この概念は、本来の意図とは異なる理解がされてきた。たとえば、1978 年改革開放後の経済成長のなかで、ある者は「差序格局」概念の文化論的な理解に向かい、ある者は近代化論の説明に適した新しい分析概念への切り替えを主張するようになった。けれども、「差序格局」には、集団論を基本とする欧米の研究では捉えきれない、中国社会における日常生活の人間関係づくりのリアリティが含まれる点が重要である。

21 世紀に入ると、「差序格局」概念の出発点でもある農村調査の知見に基づいて、現代中国農村の生活に関心をおいた研究が登場した。生活論的なアプローチに立つ研究は、「差序格局」の静態的な理解ではなくて、「厚い記述」による、農民自身の社会構築活動の把握へと向かっている。「中国新農村」や「現代中国農民」などの固定的な解釈ではなくて、農民の生活構造とその変化を内在的かつ動的に理解する方向である。この方向は、農村の人々の生活の立て直しの分析という筆者の関心とも合致する。そこで、三峡ダム建設の影響を受けた人間関係修復の営みとして農村部の祝賀会の復活をとりあげ、その復活が「差序格局」という構造の再生産と親和的である点を、住民の考え方に即して内在的に説明した。このように、「差序格局」概念の有用性は、中国農村の人々の生活構造とその変化を内在的に記述・説明しうる点にある。今後「差序格局」に特徴付けられる生活構造の解明が、生活論的アプローチからの農村研究の一つの焦点となると想定される。

注釈

[1] 「差序格局（サ ジョカッキョク）」とは中国語の直訳で、日本語で翻訳すると、「差異秩序の構造」（佐々木，2003）、「差序的な構造配置」（西澤，2019）、「差異と序列の構造」（川瀬，2019）となる。また、「郷土中国」は 1992 年で「From the Soil － The Foundations of Chinese Society」というタイトルで翻訳され、その中、「差序格局」は「the differential mode of association」（Gary Hamilton；Wang Zheng，1992）と翻訳されている。

[2] 「新農村」には、二つの含意がある。第一に、ダム建設によって水没した村落の代替地として新しく建設された村落と鎮を指す。第二に、2006 年から、政府が、農業税や商業税などの税金の免除、インフラの改善、ガバナンスの合理化、「郷鎮一体化」など、農村の発展を目指した優遇政策を実施した農村地域である（徐，2007）。

[3] 中国語の「関係（グアンシー）」とは、日本語の「関係」や、英語の「relationship」とほぼ同じ意味を持っているが、西澤（2019）によると、それ以外に、日本語の「人脈」や「コネ」より重みがあり、「特殊な利害関係」という意味合いがある（西澤，2019:77）。欧米では、「関係（グアンシー）」を中国語の発音「guan-xi」と表記している。本文では、「関係」と区別し、「関係（グアンシー）」と表示している。また、本文の「人情（レンチン）」、「圏子（チウエン ズ）」、「面子（メン ズ）」などの言葉も「関係（グアンシー）」と同じく、「差序格局」と強く関わって、中国社会独特な概念であるため、翻訳せずこのまま使っている。

[4] 佐々木（2003）によると、類型比較法とは、費が村落の実地調査からまとめた分析方法である。「それぞれの特色を解明しながら、その特色を全体像の中に位置づける手法をとる」（佐々木，2003：79）

[5] 代表としては呉文藻、潘光旦、孫本文らが取り上げる。

[6] 「雲南三村」とは、費孝通と助手張之毅が 1930 年代末から 40 年代初にかけて、雲南農村を調査し

た報告書のまとめである。その中「禄村**农**田」、「易村手工**业**」、「玉村**农业**和商**业**」と三つの報告書がある。1990 年に本として出版された（**费** & **张**，1990）。

[7] 費は 1947 年、マーガレット・ミードが著した「The American character」の各章に対する評論を「美国人的性格」というタイトルで出版したが、絶版になった。2018 年出版した「美国人的性格」は、「美国人的性格」（費 1947）を含め、費の他の二つの著作「初**访**美国」（費，1945）、「**访**美掠影」（費，1980）と合本した著作で、ここの後記は前者－「美国人的性格」（費，1947）の後記を指している。

[8] 費本人は 1940 年代におけるの創作に関して「当時は戦争期で、全ての内容を完成してから本を出版するのを待つと、家計に悪いから、原稿料を稼ぐためにより多くの投稿が必要になる。そのゆえ一つのテーマを何個の論点を分解して書くという書き方に慣れた」と、回想した（費，2018：1）。

[9] 具体的に、まず、財産は血縁によって継続され、生産活動と消費活動は家庭を単位に行われ、協力は親族と近隣の人たちによって実現され、交換は地縁に基づいてこそ可能になる。そういう生活の実態から血縁関係と地縁関係の権威性が確立され、個人の中で血縁関係と地縁関係に対する依頼心と忠誠心が形成されていく（孫，1996：24）。

[10] 国家権力はほぼすべての社会資源を独占した。物質的な資源だけではなく、就職チャンス、居住権力なども含め、農村では人民公社、都市では単位によって再分配した（孫，1996：24 ）。

[11]「道具性的な私人関係」の中で、個人感情が混ざっている関係もあれば、純粋な相互利用関係もある。一番多いのは「目標育成」的な関係である。各人は意識的に利益をもたらそうな人と積極的に関係を築くが、短時間的な報いを求めない（孫，1996：25）。

[12] 擬似血縁関係とは、地縁や業縁などの人間関係によって親しい間柄になる人の間で、「義理の父 / 母」（中国語で干爸（ガァン バ） / 干妈（ガァン マ））や、「義理の兄弟」などの呼び方を通して擬似血縁関係を築くことを指す。中国農村社会では普遍的な現象である（**杨** & 侯，1999：57）。

[13]「農家楽」とは、閻（2019）は、「日本では一般的に中国のグリーン・ツーリズムと訳され、農家が農村に訪ねる観光客を宿泊させ、食事を提供するという農村観光の一形態である」と説明している（閻，2019：114）。

参考文献

【日本語】

川瀬由高，『共同体なき社会の韻律－中国南京市郊外農村における「非境界的集合」の民族誌』弘文堂，2019.

費孝通，『生育制度』商**务**印**书馆**，1947（横山広子訳，『生育制度－中国の家族と社会』東京大学出版会，1985）.

費孝通，『**乡**土中国』上海**观**察社，1948（西澤治彦訳，『郷土中国』風響社，2019）.

李妍焱，「『中国人論』の現在：日本における中国人研究と中国における中国人研究の整理と検討」『駒澤社会学研究』39，2009，27-47.

南裕子・閻美芳編，『中国の「村」を問い直す－流動化する農村社会に生きる人々の論理』明石書店，2019.

佐々木衛，『費孝通－民族自省の社会学－』東信堂，2003.
鈴木栄太郎，『鈴木栄太郎著作集（日本農村社会学原理 上)』未来社，1968.
園田茂人，「中国的＜関係主義＞に関する基礎的考察」『ソシオロゴス』12，1988，54-67.
園田茂人，『中国人の心理と行動』日本放送出版協会，2001.
鳥越皓之，『家と村の社会学　増補版』世界思想社，1993.
三浦典子，「概説　日本の社会学　生活構造」，三浦典子・森岡清志・佐々木衛編著，『生活構造』東京大学出版会，1986，1-13.
首藤明和，「中国の「人間関係優先主義」と「后台人」－現代中国農村の民衆生活を見る視点－」『社会学評論』53（3），2002，312-328.
閻美芳，「中国の民衆による「下からの公」の生成プロセス－山東省の一農村を事例として」『社会学評論』68（2），2017，176-193.
閻美芳，「農家楽山村の議事にみる公の生成－宗族単姓村である北京市官地村を事例として」，南裕子・閻美芳編，『中国の「村」を問い直す－流動化する農村社会に生きる人々の論理』明石書店，2019，92-112.

【中国語】
卜长莉，「“差序格局”的的理论诠释及现代内涵」『社会学研究』(1)，2003，21-29.
董磊明 & 李蹊，「人情往来与新“差序格局”－基于河北顺平县东委村的考察」『民俗研究』121（3），2015，118-126.
费孝通 & 张之毅，『云南三村』，天津人民出版社，1990.
费孝通，『美国人的性格』，北京联合出版公司，2018.
何梦笔，『网络文化与华人社会经济行为方式』，山西经济出版社，1998.
黄光国，『人情与面子：中国人的权利游戏』，黄光国編，『面子：中国人的权利游戏』，中国人民大学出版社，2004.
马戎，「“差序格局”－中国传统社会结构和中国人行为的解读」『北京大学学报（哲学社会科学版)』(2)，2007，131-142.
Max Weber，『Konfuziamismus and Taoismus』，J.C.B Mohr（Paul Siebeck）Tübingen, 1920（王荣芬訳，『儒教与道教』商务印书馆，1995）.
雷亨顺編，『中国三峡移民』，重庆大学出版社，2002.
佐々木衛著 & 聂莉莉訳「亚洲社会变动理论的可能性－重读费孝通著述」『社会学研究』121（3），2000，34-41.
沈永昌「农村移风易俗和新农村建设－来自上海市郊农村的情况调查」『上海农业经济』08（6），2008，28-30.
苏力，「较真“差序格局”」『北京大学学报（哲学社会科学版)』54（1），2017，90-100.
孙立平，「“关系”、社会关系与社会结构」『社会学研究』(5)，1996，20-30.
徐勇「在社会主义新农村建设中推进农村社区建设」『江汉论坛』07（4），2007，12-15.
杨善华 & 侯红蕊，「血缘、姻缘、亲情与利益－现阶段中国农村社会中“差序格局”的“理性化”趋势」『宁夏社会科学』(6)，1999，3-5.

翟学伟,「中国人际关系的特质－本土概念及其模式」『社会学研究』(4), 1993, 74-83.
翟学伟,「个人地位：一个概念及其分析框架－中国日常社会的真实构建」『中国社会科学』(4), 1999, 144-157.
翟学伟,「人情, 面子与权力的在生产」『社会学研究』(5), 2004, 48-57.
翟学伟,「再论“差序格局”的贡献、局限与理论遗产」『中国社会科学』(3), 2009, 152-158
周建国,「紧缩圈层结构论」『社会科学研究』(2), 2002, 98-102.

【英語】
Hsiao-Tung Fei・with a preface by Bronislaw Malinowski,『Peasant life in China : a field study of country life in the Yangtze Valley』,George Routledge,1939.
費孝通,『乡土中国』, 上海观察社, 1948（Translation by Gary Hamilton and Wang Zheng,『From the Soil：the Foundations of Chinese Society』, Berkeley：University of California Press, 1992）.

A Tentative Application of the Concept “Chaxugeju” (Differential Mode of Association) in Chinese Rural Studies ― A Field Study on the Implications of Banquet in a “New Rural Area” of Chongqing

DU, Anran

This paper examines the changes in understanding the concept of “Chaxugeju” (Differential Mode of Association), which was brought up in 1948, and demonstrates applicabilities of this concept through the analysis of the interpersonal relationship in a “New Rural Area” that has been greatly influenced by the large-scale development. On the basis of some cases where local residents in rural areas restored interpersonal relationship affected by the construction of the Three Gorges Dam by holding various banquets, the paper illustrates, from the perspective of the locals, how such measures should strengthen the traditional idea of “Chaxugeju”. In this way, the applicabilities of the “Chaxugeju” theory lie in the fact that it can internally describe and explain the living structure of people in rural areas in China. In the future, it is expected that the elucidation of living structure characterised by "Chaxugeju" will be a research focus from a life-theoretic approach.